

特集 1

ピティナ・ワールドフェスティバル

国際シンポジウム

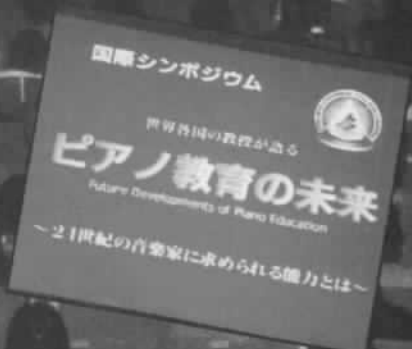
～ピアノ教育の未来を語る～

ローラント・ケラー

2002年3月29日（金）東京芸術劇場にて国際シンポジウムが開催された。ピアノ教育の未来像を探るべく、5カ国6名の著名音楽教授・指導者によって、様々な切り口から興味深い討論がなされた。ここにその内容の一部をお届けする。

音楽指導のプロフェッショナルの言葉には、説得力と普遍的な指導理念が含まれており、会場の聴衆に熱いメッセージとして届いたことだろう。今後の指導の参考にして頂けると幸いである。

撮影：星野清 監修：広報・編集委員会





1.各国のピアノ指導の現場は今

各国の音楽を取り巻く教育環境はいかに？

播本三恵子先生：皆様、雨の中、国際シンポジウムのためにお集まりいただきましてありがとうございます。心より御礼申し上げます。私、総合司会を務めさせていただきます播本三恵子と申します。本来ならば、ここでピティナの創立者の福田靖子先生が皆様にお声をかけてくださるはずでしたが、昨年11月に永眠されました。私たちはこの国際シンポジウムを約2年前に計画し始めたのですが、そのときには、まさか先生がこの日を一緒に迎えることができないとは想像もしておりませんでした。本日このシンポジウムのパネリストとしてお越し下さっているのは、いずれも先生たちなくしては、今日のピティナは形が変わっていたと思われるほど、大きな影響を与えてくださった先生方です。

21世紀を迎えて初めてのシンポジウムで、今後我々がどのようにクラシック音楽文化と向かい合っていけばよいかという課題を、皆様と共に考えていきたいと思えます。これから音楽に携わるものとして、どのように生きて行けばよいかというヒントを、心の中に残していただければ大変嬉しく思います。

まずは世界各国のクラシック音楽の現状をお話していただければと思います。クラシック音楽について聴衆の量ですとか、大学における生徒の国籍について、また、若い演奏家に演奏の場が十分に提供されているかなど、なんでも結構です。

ローラント・ケラー先生（以下ケラー先生）：

私はドイツ人ですが、14年前からウィーン国立音楽大学で教えておりますので、オーストリアの事情について主にお話したいと思

います。オーストリアはとても小さな国で、全国の人口を集めても東京の人口よりも少ないです。そして国内でも都市と郊外で大きな差があります。私が現在住んで、また教えているウィーンという都市は世界的にも有名な音楽都市で、演奏会が頻繁に催されており、世界各国からたくさんの聴衆を集めております。私の教えているウィーン国立音楽大学はヨーロッパで最大の音楽大学で、学生数は約3千人でその国籍は様々です。その中で自国オーストリアの学生は比較的少ないのですが、才能の飛びぬけた生徒には演奏機会提供など、色々な形で援助や助成が行われています。一方地方では、特に夏になると様々な音楽祭が開かれ、多くの音楽活動が展開されています。ここでもオーストリア人が演奏する機会は頻繁にあります。ですがそれに対して、外国から勉強にきている学生にはそのような機会が少ないようです。

播本先生：ウィーン国立音楽大学では外国人の学生が多く、特に東ヨーロッパ圏の人が多くなったと伺いました。次にボール先生にアメリカでのお話を伺いたいと思います。

ボール・ボライ先生（以下ボライ先生）：

まず私は歴史を振り返りながらお話ししたいと思います。1800年フランス革命、1860年アメリカ南北戦争、1914年第一次世界大戦勃発と共産主義の誕生、1945年第二次世界大戦勃発、2001年9月11日の出来事、これらは世界で重要な変動が起こった年を指します。社会学者は、それぞれが大体50年ずつ離れているので、世界史には50年の周期があるのではないかと検証し

「私は生徒にとって良いと思われることは、生徒以上にオープンな姿勢を取れる指導してきました。」(ジャック・ルヴィエ先生)



ています。音楽の歴史。または音楽指導の歴史を見ても、やはり同じような周期で大きな動きがある

ことが分かります。アメリカではスタインウェイ社が南北戦争の終結時に生まれました。世界的にみて画期的なことだと思います。少し時代は飛びますが、1900年代、カワイ、ヤマハが素晴らしいピアノをつくり、日本はピアノの世界を革命的に変革させたと言えるでしょう。これもとても重要なことですから注目しなければなりません。

1800年までは、若者は音楽を勉強しにヨーロッパへ渡り、フランス・リストのような優れた音楽家の元で研鑽を積んでいましたが、状況は変わり、アメリカは成長して先進国となりました。第一次世界大戦の終わり頃、政府が助成して100以上のピアノメーカーが誕生し、非常に人気を高めました。ウィルソン大統領 (Woodrow Wilson: 第28代目アメリカ合衆国大統領 在任1913-1921) は、「アメリカの中産階級を象徴するのはヘンリー・フォードの車ではなく、ピアノなのだ」と言ったくらいです。子供は他の学問と同じように、学校でピアノを学ぶ機会を与えられるようになったのです。

その後、1930年に大恐慌が起こって状況は一変し、そのような余裕はなくなりました。その後第二

次世界大戦が起こり、その影響で世界が変わったのです。

日本では戦後50年、かつてのウィルソン大統領と同様のことを試み、今日ではだれもがピアノを弾ける環境が整っています。それがまたアメリカに影響を与えているのです。アメリカの大学に来るとわかりますが、学生の中でかなりの数を日本人留学生が占めています。ジュリアード音楽院の学長に聞いたところ、60%がアジアからの留学生だということでした。これは大きな数字ですが、アジアのピアノ指導者や楽器メーカーの影響でこれだけアメリカにも変化があったということです。というわけで、人種、のつぽであるアメリカは、19世紀はヨーロッパ、20世紀はアジアの影響を受けたわけ

です。今、21世紀に入りましたが、私たちは昨年の悲劇を振り返らなければなりません。今後の社会や教育、文化のためにもよく考えなければならぬ大きな問題です。文化や美しい音楽がなければ、人間は無に等しいと言えるでしょう。残念ながら現在、音楽の専門学校というのはあまりありません。公立の学校も音楽をあまり教えないという悩ましい状況です。アメリカの子供の多くは音楽を勉強する機会があまりなく、クラシック音楽を鑑賞する機会もなかなかないというのが現状です。もちろんラジオやテレビをつければ音楽が流れますが、いわゆるポピュラ

ー音楽で、子供たちに聞いて欲しい音楽とは異なるので問題視しています。アメリカにおける音楽教育、指導のカリキュラム、どのような教材を使用するののかということも難しい問題です。アメリカには、全国統一した教育システムというものがありません。資格や免許を持たず、訓練も受けずに、音楽を教えている先生もいます。これは一つの課題です。

その一方で、アメリカは優れた文化が融合するつぽです。一国であれほど優れたオーケストラや歌劇場が集中する国はありません。ボランティア活動、資金調達、寄付活動などは盛んに行われています。文化活動あるいは音楽活動に、自発的にボランティアとして参加しますし、スポンサーにもなります。

今井顕先生: ケラー先生とボライ先生のお話を聞いていて、共通点として、国籍や人種のことについて考えるところがありました。私自身も外国が長かったのですが、われわれ日本人から見て、同じ言語を話す英国と米国はなんとなく同じなのかなというイメージがあるのですが、リタマン先生ご自身から見てどうでしょう? アメリカ人と英国人とは、スタイルからして、音楽に対する態度にどこが違うところがあるのでしょうか?

ジャネット・リタマン先生: ありがとうございます。今回東京に来て、このシンポジウムに参加する機会をいただき、大変嬉しく思っています。私からは英国全体というよりも、イングランドについて申し上げます。イングランドの大都市というのは様々な活動の中心地となっていますし、もちろん優れた音楽の中心地でもあります。また音楽家が活動しやすい豊かな環境が整っています。こういった都市には専門の音楽学校があり、公立の学校でも教育の一環として提供されています。そういうところがポール・ボライ先生の話と違うところでありましょう。ただ、もちろん水準につきましては様々

ですし、また、誰もが音楽を楽しめるようなチャンスがあるべきだと思います。イングランド内には専門的な音楽学校がありますが、それらは政府が創立して資金を提供しており、特に才能の豊かな若い学生のための学校です。卒業後さらに高等教育機関へ進学する者が多くなっています。例えば私が学長を務めております英国王立音楽大学に勉強に来る者もおります。

ロンドンというのは非常にコスモポリタンの音楽環境を提供しており、そういう意味では米国風と似通っていると思います。また、私どももやはり、海外からの学生、教授陣、そして音楽家を受け入れて参りました。ロンドンにも非常に多くの日本の音楽家が入ってきて、演奏し、定住なさっています。

播本先生：それではお隣の国、パリの様子はいかがでしょうか。ルヴィエ先生は横山幸雄さんや、東誠三さんなど、日本でかなり有名になった方を含め、たくさんの日本人の生徒さんを教えていらっしゃると思いますが、そのあたりを交えてお話し頂けますでしょうか。

ジャック・ルヴィエ先生（以下ルヴィエ先生）：

私はこれまで2,500人以上の日本人の学生を教えてまいりました。私自身も豊かで素晴らしい経験をしたと思います。パリの音楽大学には多くの日本人、または外国人がおります。以前ですと、例えば横山幸雄さんが勉強していた時代には、私のクラスに日本人は4〜5人、あるいはそれよりも少なかったかもしれません。しかし今はもっと多くの日本人学生を教えています。ただフランスでは最近受験生自体が減ってきています。以前は音楽大学を受験する学生が200人から250人おりましたが、今年は140人でした。年齢制限を設けているのが一因かもしれません。

今井先生：ところで横山さんなど、



生徒さんがピアニストとして才能を開花させているとのこと、それは彼がその才能を中に持って生まれたということなのでしょうか、それとも、教師としての大きなサポートがないと才能として花開かなかったものなのでしょうか。教師としてできること、できないことには随分差がありますか？

ルヴィエ先生：生徒の一人、横山幸雄さんはすでに素晴らしい音楽家となり、キャリアを積んでおります。私は彼を若い頃から見てきておりますが、最近さらに豊かな才能が開花してきているように思います。数日前もコンサートを開かせていただきましたが、彼の成長ぶりを非常に嬉しく思っています。初めは普通の教え子でしたが、彼が非常に才能豊かということで、ショパンコンクールへ向けて準備をさせたところ入賞しました。今から10年前ですね。その後彼からヴラド・ペルルミュテル氏に教わってもよいかと聞かれ、私の師でもありましたので、もちろんそうすべきだと答えました。私は彼のために良いと思って、彼よりもオープンな姿勢をとれるように指導して参りました。

播本先生：次に、是非マカロフ先生にお聞きしたいのですが、日本の場合は、幼児教育と中層教育、そしてその後成長してからという風に、先生が交代しやすいのですが、マカロフ先生は幼児の導入から始めて、例えばアレクサンダー・ガブリリョフさん（2000年度浜松国際コンクール第1位）も一人

でお育てになったと聞いています。彼のコンサートを聞きに行つて、まだ16歳の若さで、あの技術はどこから生まれたのかと是非先生にお聞きしたいと思っています。

ヴィクトール・マカロフ先生：私はガブリリョフについての話をさせていただけることを大変嬉しく思います。

私は、ロシアで生まれ、ウクライナからオーストラリアに移住しました。まだ4年しか経っておりませんが、今日はオーストラリアの代表としてお話しております。ガブリリョフがウクライナの音楽学校へ来たのは7歳の頃でした。彼の両親が連れてきたのですが、彼らはガブリリョフをピアニストにしようと思っていたわけではなく、合唱団員か指揮者にしたいと言っていました。私は入学試験のオーディションの時に、初めて彼に会ったのですが、彼は非常に美しい声を持っており、その歌唱力は素晴らしいものでした。これは教師としての直感だったのかも知れませんが、歌を聞いて、非常に才能とエネルギーがあると感じました。そして自分の生徒にと、両親に願い出たのです。

ただ当初から彼をプロのピアニストにしようとは思っていませんでした。他の生徒も同じです。勉強したい人にはピアノを弾けるようにすること、そして将来、音楽と共に生きていけるように手伝おうと考えています。私は、生徒の精神的な発育について本を書いております。芸術や文学、コミュニケーションというのは人にとって大変重要だと思っています。そして2つ目に注意力、集中力の



切さについて言及しています。

大切なのは、音楽を勉強して人格を磨いていくことだと思います。7歳では判りませんが、12、13歳頃になると、その後の10年間でどうなるか考えます。年の若い生徒は、審査員にとって非常に魅力的に見えるかもしれませんが、私は精神的あるいは、音楽家としての発展が重要だと考えます。

播本先生：バスティン先生については、江崎先生が一番よくご存知だと思いますので、よろしくお願いします。

江崎光世先生（以下江崎先生）：ピティナの会員の中には、バスティンという名前を聞いたことがない方はいらっしゃると思います。これは福田先生がメソードを日本に導入されたことが一番の要因だと思いますが、その他にも、子供のための教育に関して日本が画期的に変革をしたことが、挙げられると思います。バスティンメソードは、ご自分がピアノの先生であるという立場からお書きになったわけですが、編纂された動機をお伺いできますでしょうか。

ジェーン・バスティン先生：ありがとうございます。この質問にお答えする前に、先ほどポールさんとお話になっていた米国の地域の音楽状況について、少し述べたいと思います。最近、状況が劇的に変わってきております。私たち家族はカリフォルニアに75年に引っ越しましたが、その後音楽（のカリキュラム）が公立学校からなくなってしまいました。私の娘が学校

2.指導者×生徒×親の三角関係

指導者は生徒にどうアプローチすればよいか、親は子供とどうコミットすればよいか

へ行っても、音楽の授業がなかったのです。それに対して、音楽指導者の団体などで、学生の演奏や学習の機会を提供しようとした。私も引っ越す何年も前からメソードについて考えていたわけですが、その時になっていよいよ音楽的理解を教える必要性を切実に感じたのです。

こうした状況に対して、様々な団体が運動を始め、もう一度音楽を科目として学校へ戻そうとしました。そして30年後に成功し、音楽の授業が多くの公立学校へ戻ってきたわけです。

90年代始めのサンディエゴ、カリフォルニア周辺地域においては、音楽活動がどん底の状態でした。楽団が失われてしまったのです。すぐに他の音楽団体がたち上がり、新しいコンサートシリーズやソロシリーズを始めました。その結果、今までよりも公演の数が増えました。結局ギャップを埋めようという動きが出てきたわけです。数年後ドナーが現れ、楽団を救済しましたので、活動が再開されました。そして驚異的なスピードでラッシュアワーコンサートなど、様々な公演が行われるようになりました。聴衆が一般層に拡がりました。とにかく、より多くの人たちにクラシック音楽を届けようという努力が始まったのです。私も実は2週間前に1億2千万ドルの寄付をサンディエゴのシンフォニー行いました。

このように、ある時期クラシック音楽にとって最低の時期があったのですが、それに対して人々が自主的にたち上がり、音楽が必要だと訴えました。クラシック音楽の必要性が認められたということです。このように音楽に対する理解を生徒に教えると、結局コンサートの聴衆が育つのですね。

誰でもピアノを勉強することが

できますし、学ぶ動機は様々だと思います。レッスンに来る生徒は、自分が教える目的と違う目的で来ているかもしれませんが、とにかく私たちは生徒のニーズに応えるという役割を果たしたいと思います。つまり、すべての人は音楽を理解するチャンスを与えられるべきで、演奏したい音楽を演奏すべきだと考える、これがメソード編纂の動機となりました。

生徒を育てるということ と、親の役割

今井先生：バスティン先生のお考えでは、10、20年単位で生徒を育てていくものなのでしょうか。

バスティン先生：そうだと思います。色々な調査が行われておりまして、それによりますと、ピアノのレッスンを早くから受ければ、頭が良くなると言われています。ある時テレビで1年生の女の子が、自分は頭が一番よく、それはピアノを習っているからだと言いました。親はこれ聞き、早くからピアノを習ったほうが良いと思ったようで、急にピアノを習い始める子どもの年齢が下がりました。

播本先生：一つお伺いしたいのですが、ピアノを弾くと頭が良くなると思われませんか？

ケラー先生：音楽をやっている子供たちは、学校で他の子供たちよりも優れているというデータがあるそうです。

バスティン先生：頭が良いというのは、その女の子が言っていたことで、私が直接知っているわけではありません。とにかくピアノのレ

ッスンを受ける時に、子供は初めて一対一の学習の機会を得るわけです。これは学び方を学ぶと言うようなことでありまして、それが他の学校の科目にも役に立つのだと思います。テレビの女の子が自分は賢いと言ったのは、学習の方法を学んだからだだと思います。それが一番大きなメリットになるのではないのでしょうか。学び方を一対一のペースで学習していくということです。学校では集団行動になるので、なかなか一対一は難しいですね。

ピアノのレッスンではいわゆる規律、しつけという問題があります。毎日練習し、何分間練習したか報告をして、そうした規律やしつけを小さい頃から学ぶことで、それが学校にも影響していると思います。

今井先生：なかなか一人で覚えたり、自分だけでちゃんと練習したりするのは難しく、コントロールという言葉が悪いですが、そこに先生や親が見守る態度が必要になってくると思いますが、バスティン先生は、親と先生の割合をどのようにお考えですか。

バスティン先生：両親というのは何と言っても重要です。早くから関わるべきだと思います。私はよくお母さんに、この小さな年齢から始めるのならば、あなたもコミットしなければならぬ、お母さんが家で見守っていかねばならないと伝えています。

今井先生：マカロフ先生はサーシャ君についてはご自身で音楽の教育をなさったわけですね。

マカロフ先生：バスティン先生のおっしゃる通り、親が支援することはとても大事だと思います。例えば、サーシャの場合は11、12歳頃になるまで毎回レッスンにお母さんがついてきました。時にはお父さんもついてきました。そして私が書いてくださいと言ったことを、すべてメモして持って帰ってくれました。教えるということをして

鳥にたとえますと、片方の羽が親、もう片方の羽が教師、そして子供が真ん中にいるということです。これは通常に機能すれば良いのですが、羽の片方がうまくいかない場合、結局子供に害が及ぶことがあると思います。バランスが必要だということです。親の助けは必要で、その繋がりは続くわけです。

今井先生：江崎先生、日本の場合は親がやかましくて、子供を要領させることがあるようなのですが、どうでしょうか。日本の状態をどうご覧になっていますか？

江崎先生：これは様々だと思います。地方、都会によっても違うかもしれませんが、これは個々の人間の考え方であって、過激になる方もいますし、冷静になる方もいらっしゃると思います。とにかく、子供たちの素直な成長が一番の望みだと思います。このあたりもバスティン先生にお伺いしたいと思います。

バスティン先生：アメリカでは親と教師と子供をマジックトライアングルと言っています。それはうるさくするということではありません。日本の子供たちの親は非常に一生懸命助けてくれますので良いと思います。例えばアメリカでは仕事をしていない親の場合、子供たちが練習しているかをしっかりと確認してくれているようです。

今井先生：フランスの親というのはやかましそうに見えますけれども、ルヴィエ先生、どうなのでしょう。

ルヴィエ先生：例えばエレン・グリモーの場合、最初のレッスンは12歳の時でした。この時は親御さんと一緒にいました。やはり最初は親がついてくる場合が多いのですが、それは非常に助けになったと思います。ただ、個人的には、本当に若い生徒はともかく、それ以外の場合、親御さんはできれば外で待ってもら方が良いと思います。ある年齢に達したら、親御さんは外に出ていただいて、生徒と直接話し、教えたいというのが私の意見です。

播本先生：ありがとうございます。親の話が出てくると、私も同じ年代のものとして耳が痛いところがあります。ここで15分ほど休憩したいと思います。



3.ピアノ学習者の将来像は

音楽を学ぶ姿勢と指導者のサポート方法を検証する

コンクールの捉え方、取り組み方について

播本先生：はい、いよいよ後半に入ります。皆さんの興味のあることで具体的なことをお話ししたいと思います。とりあえずコンクールの話をしたいと思います。コンクールと言えばポール・ボライ先生でしょうか。先生が福田靖子先生に、教育のレベルを上げたければコンクールを開くことが一番だとお話したことで、ビティナのピアノコンペティションも始まりました。ポール先生は世界各地のコンクールにいらっしゃいますので、私も何度か外国でお会いしたことがあります。ジーナ・バックアウワーのコンクールにも招待していただき、先ほどお話ししていただいたボランティアの凄さというものを目の当たりにしました。次のジーナ・バックアウワーのコンクールでは、世界で初めての新しい試みがな

「教えるということ」を鳥にたとえようと、片方の羽が親、もう片方の羽が教師、そして子供が真ん中にいるということなんです。」(ヴィクトール・マカロフ先生)

されます。先生がその試みに到達するまでに、どのようにお考えになって、答えを出されたかということを含めてお話頂きたいと思います。

ボライ先生：ありがとうございます。実は数分前にお話があるまで、私は福田先生にお話したことがきっかけでビティナのコンクールが始まったことをしりませんでした。私の言葉がきっかけでビティナ・ピアノコンペティションが生まれたとは、とても光栄なことです。

よくコンクールはよくないという意見が聞かれますが、私は反論します。コンクールというのは、何かを達し遂げた人を評価するというもので、これはスポーツでも学校でも同じです。人生には必ず競争があるはずで、そして文明に貢献したり、芸術に貢献した人はそれなりの評価をされることが当然だと思います。もっとコンクールを増やすべきだと思います。

今年ジーナ・バックアウワー国際コンクールで新しい試みをするということについてですが、コンクールで公平な審査結果が出ないという経験がよくあると思いま

す。優秀なピアニストが必ずしも十分な評価を受けていないこともあると思います。ですから、未来の芸術家に演奏の機会を与えようと考えました。そこでコンクールに多数の応募者が演奏しに来るのではなく、事前に選別をして優秀な人を集め、お互いに演奏を聞いて、若い芸術家として演奏体験ができるようにしてみました。とにかく公平に扱って芸術を高めることが大事だと思いました。今回のコンクールでは一人95分の時間を与え、そして、3回演奏機会を与えます。聴衆もこれで満足だと思いますし、審査員もこの変更を喜んでいます。参加者もそれだけ多くチャンスが増えたということで満足しているようです。今年は520名の方から応募がありましたが、これはピアノコンクールの応募者としては世界記録だと聞いています。その中から選ばれたのが32名です。

播本先生：これは選抜が大変難しかったと思います。そのためにポール先生は世界中を走り回られて、ブレ・オーディションを行われました。

マカロフ先生：ウクライナにはいくつかの若い人のためのコンクールがあります。キエフでは、ホロヴィッツを記念したコンクールがあり、三つのグループで成り立っています。若年層と、もう少し上の層と、大人向けに分けられます。2003年のコンクールで私は審査員を務めることになっておりますが、大人の部門では、1位が1万ドル、中間層では6千ドル、若年層では4千ドルの賞金が贈られます。ホロヴィッツはウクライナのピアニストで、キエフで勉強をしました。そしてその他にもクライネフコンクールというのがあります。彼は現在ドイツに住んでおりますが、ロシアでコンクールが開かれました。ホロヴィッツのコンクールと同じように、3次まであります。最初が20分、2次が30～40分、そして最後にオーケストラ





ポール・ポライ

とのコンチェルトがあるということで、非常にハードなコンクールです。このコンクールで良いところは、優勝者には世界中での演奏旅行が提供されることです。

今井先生：ガブリリクさんを指導されるにあたり、児童心理学のことまでも研究されたという話を聞きました。そういうことを踏まえ、コンクールで子供に弾かせて競争させ、順位や点数が付くことによって、子供の心に影響が出ることはないのでしょうか。

マカロフ先生：どんな音楽家にとっても、音楽を勉強し、愛することが大事です。コンクールに出るのが目的ではありません。しかしながら、もし出るのであれば長い時間が掛かります。精神的成長が必要なのです。コンクールでより良い成績を残すためには、参加している時に他の参加者とコンタクトを取るのではなく、集中をしたほうが良いと思います。私のルールですと、先生や両親、友達言葉には例外として耳を傾けても良いかもしれませんが、参加している時は他人の言葉に耳を貸すべきではありません。ポライ先生の意見に賛成ですが、単に経験を積むためにコンクールにでるべきではないと思います。

今井先生：子供のコンクールになる

と、日本ではやはり人前で弾く経験や、勉強の励みに行われていることが多いと思うのですが、どうなのでしょう。

マカロフ先生：大人と子供、またはジュニアのコンクールでは、大きな差があると思います。オーストラリアには地方のコンクールがたくさんありまして、アマチュアやプロがミックスされたようなものもあります。単に経験が積めるというだけでなく、親や教師などとコミュニケーションが図れるという意味では良いと思います。ポライ先生がおっしゃったように、レベルに関係なく、いろいろな要素が入ってきても良いと思います。子供はコンクールの機会を与えられると、自分が演奏したり、人の演奏を聞いたり、とてもポジティブな面が見られますので、それは良いことです。他の国は分かりませんが、オーストラリアにおいては日本のやり方を勉強するべきだと思います。子

「何人かの人を集めて演奏させるのが良いと思います。子供はお互いの前だと喜んで弾くようです。それがいわゆるリサイクルという段階になり、コンサート、コンクールという形が出てきます。」（ポール・ポライ先生）

国際シンポジウム レポート公開 「私はシンポジウムを こう聞いた！」

国際シンポジウム開催にあたり、リポーターを公募いたしました。その一部をここにご紹介いたします。

●伊藤裕子さん（正会員・パステイン研究会 in 北九州会員）

どの先生方もピアノのレベルを向上させるには、コンクールをするのが良いと思われているということが分かりました。子供のコンクールで、点数・順位がつくことについては、演奏する事が大事で、結果ではなく、目標を決めることによって努力していく過程が大切だと思います。子供が経験を積み重ねることによって、成長していくので、参加する事に意義があると思います。

またルヴィエ氏が言われるように、技術・テクニックが重視されるのが現状です。今年から公立の学校が、完全週5日制実施で、毎週土曜日がお休みになります。子供達にも、時間のゆとりが出来るので、映画や絵画を鑑賞して、人生を楽しむように指導し、先生は子供達に、愛情を持って、生徒が最高の生徒だと思って接し、明日からマカロフ氏のおっしゃる「魔法の手」をつくるために日々、努力していこうと思えました。6人の先生方のコメントが、今後の私の指導の方法や、ヒントになりました。

●大塚京子さん（正会員）

今回6人の先生方のお話を聴かせて、クラシック界の音楽事情の悩みは全世界共通だと思いました。大事なお話をあらかじめという意識だけではなく、指導者として「神から与えられた生徒を育成する」という意識を持つことの重要性を痛感し、先生方のコメントには正直なところショックを受けました。ホールを出るとき心がずっしり重くなりましたが、先生方の仰ったことのひとつでも今後のレッスンに生かすことができればと決意を新たにしました。音楽は命なり!!継続は力なり!!

供の音楽に関しては素晴らしい点がありますので、日本のクラシック音楽の将来については心配しておりません。

バスティン先生：コンクールと子供という問題ですが、これは両親にも覚悟してもらわなければならないと思います。例えば子供が一位になった場合、それは素晴らしいけれども、すぐにカーネギーホールに出られるわけではないということ、また、一位になれなくてもそれは失敗ではないということを経験に教える必要はないと思います。これは子供の話ですが、コンクールに出てベストを尽せば良いのだと教えるべきです。例えば、去年だれが優勝したかなどということはありません記憶にないと思います。しかもそれは、その時の審査員が判断を下したことで、子供もコンピューターではありませんので、コンディションによって演奏にムラがあります。そのようなことを先に親に話しておくようにしています。また、審査員については、判断は最終決定ということですから、決定に異議を唱えるくらいだったら、コンクールに参加すべきではないと思います。基本的には何もプラスにならなかった子供はいないと思います。

播本先生：ボライ先生はゾーナ・バックアウワーコンクールでジュニアの部門を後からつくりましたね。それで日本からもピティナのコンペティションに入賞して、ソルトレークシティで演奏した人もいましたけれども、ジュニアの部門を開いてから何か変化がありま

したでしょうか。

ボライ先生：マカロフ先生とバスティン先生のおっしゃったことをサポートする上で申し上げますが、演奏の仕方を学ぶ場合、結局演奏してみないと演奏の仕方は分からないわけです。従って、演奏の状況を作り上げるべきではないかと思っています。ですから何人かの人を集めて演奏させるのが良いと思います。子供はお互いの前だと喜んで弾くようです。それがいわゆるリサイタルという段階になり、コンサート、コンクールという形が出てきます。優秀な指導者ならば、子供に一番合ったコンクールに送って、準備の手助けもします。適切なガイダンスを提供するということです。

国際コンクールに参加する場合は、とても大掛かりです。海を渡ることもあるかもしれません。若い子供たちが美しく演奏し、勇気と参加するスピリットをもっているならば、先生と親がそれを支えるでしょう。われわれはピティナやゾーナ・バックアウワーのコンクールで、非常に優れた演奏を目の当たりにしています。こういった子供たちは最高の指導を受けてきた子たちだと思います。過剰なプライドを持っていたり、優勝しなければ、怒ったり、態度が悪くなったりすることもなく、優れた参加者です。そして今でも名前を覚えていますが、ピティナの入賞者から色々なコンクールに参加し、キャリアを積む人も出てきています。そういう人たちの成功をたどっていくと、結局その源にあったのは、懸命な教師、親の存在があると思います。様々な段階を通じて優れた指導があったのではないかと思います。

アジア人の活躍

今井先生：国際コンクールを見ますと、最近、日本人の活躍やアジア人の活躍がよく見られます。日本人と韓国人と中国人は、まとめてアジア人と見られますが、こ

れを外から見てどんな差があるかという点を一番正直に語ってくださる先生はどなたでしょうか。

播本先生：ボール先生でしょうか。この前先生とお話したときに、21世紀はアジアの時代だと力強くおっしゃっていました。いかがでしょうか。ただしそこで日本人がどのような役割をもつのがよく分かりません。最近中国のピアニストで素晴らしい人がたくさん出てきていますし、日本人は今一つ元気がないように感じております。アジアと言いましてもそれぞれ違った国民性を持っていると思いますが、アジアの特徴やアジアの良さをなるべくポジティブに語っていただければと思います。

ボライ先生：世界中でオーディションを行い、各国の違いを目の当たりにしてきましたが、日本はこうで韓国がこうだといったことは、申し上げられないと思います。個人個人が違います。あえて言うならば日本の方は演奏の歴史が長く、クラシック音楽の伝統が長いことが有利だと言えます。日本で西洋音楽が紹介されたのはすでに百年以上前で、そして常にクラシック音楽はポピュラーであったということです。対して、クラシック音楽の歴史が浅い国のほうがより積極的に意欲があるように見受けられます。自分を表現したいという気持ちがエキサイティングな演奏に反映されると思います。国際社会で見とめられたいという気持ちも強いのです。例えば、韓国の人々は本当にトップに立ちたいという決意があると思います。中国の参加者は、まだ国際舞台での経験がないので、まだ実験的なところがあると思います。人口の多い国ですし、これまでのところは運が良かったのでしょう。優秀な生徒を選んで時間をかけて教えますので、少しやり方が違うと思います。一般論としてどの国の方法が良いかということはありませんが、色々違いはあると申し上げたいと思います。



「とにかく、音楽を紹介することです。子供も提示の仕方次第で、興味を持ってくれ」と思います。(ジェーン・バスティン先生)



今井先生：学生についてはリタマン先生に聞くのが良いかと思います。

間をかけたほうが良いということでしょう。それからパフォーマンスに何を求めるかという姿勢が違ふと思います。

留学のタイミング

播本先生：ケラー先生にお伺いしたいのですが、ウィーン国立音楽大学にもアジア人がたくさんいると思いますが、日本の学生は比較的遅く留学をします。今井先生のようなケースは稀だったと思います。韓国ではかなり早い時期に留学をさせるという話を聞きましたが、それはどうなのでしょう。

ケラー先生：お話がありました通りで、ウィーン音楽大学で勉強をされる日本人の方々は、だいたい日本で勉強を終えて、自分の演奏を成熟させて発展させるために来ている方が多いです。韓国の場合はだいたい15歳くらいからいらっしゃって、勉強を始めから最後までウィーンで学び、完成していきたいという考えの方が多くいます。

播本先生：先生からご覧になって、一般論として早くからヨーロッパで勉強する人と、日本で大学を卒業して、さらに勉強するためにヨーロッパへ行く人とは、結果的にどのような違いが出てくるとお考えですか。

ケラー先生：今のご質問を一般的に

● 辻本奈美さん（フリーライター）

音楽を一生懸命勉強したにも関わらず、投資した分の見返りがなかなか得られず、悩む学生が多くなっています。少子化が落ち着き、子どもの数が一定を保つようになるまで、この問題は続くように思われます。

この現状に対し、今回の国際シンポジウムでは、そもそも見返りやお金のために音楽を勉強するのではないという意見が、多くの先生方から出され、私は大変感銘を受けました。ヴィクトール・マカロフ先生がおっしゃったように、大切なのは音楽を勉強し、人格を磨いていこうとする姿勢だと思います。音楽が人格形成に大きな役割を果たし、生活の中で精神性に大きく影響するという価値観を、もっと社会に認識してほしいと思います。そのような価値を、早くから親や教師、そして生徒がきちんと理解し、将来を見据えた上で勉強することはとても有意義だと考えます。そうすれば生徒を期待で追い詰めることなく、楽しくのびのびと勉強させることができるのではないのでしょうか。日本がクラシック音楽の将来を不安に思う理由には、やはり儲けられなければ衰退するという、アメリカに似た経済の仕組みから来ていると思います。優秀な指導者が溢れている現在、そのような意識を変えていく絶好のチャンスではないのでしょうか。

子どもを音楽と共に生きていくように育てるという話題にも、大変関心を持ちました。私自身、小さい頃、音楽教室でオペレッタの上演に参加したことがありました。それはとても感動的な体験で、それ以来、私は音楽から離れられなくなりました。なかなか個人で教えている先生は、大掛かりなことをするのは難しいかもしれませんが、そのような楽しい体験ができる場が増えていくことを望んでいます。ピアノだけに固執せず、色々な音楽、色々な生活の中で、音楽を学ぶべきだと、先生方の話を聞いて思いました。

音楽を勉強したことがなくても、その価値を分かっている人は意外に多いと思います。しかし、日本でのコンサートは一般的にチケット代が高く、曲目も難しいため敬遠する人が多いようです。指導者や演奏家が、気軽に足を運べるイベントやコンサートをもっと提供しても良いと思います。クラシック音楽の価値を主張する運動がある限り、それが大きく発展することはなくても、衰退する

リタマン先生：私は実は、日本の生徒さんとの付き合いが、韓国、中国の生徒さんよりも長いということをもっと申し上げなければなりません。私は演奏のパフォーマンスということよりも、演奏に対するアプローチについて申し上げたいと思います。演奏を聞いて一番感心するのは、微妙な陰影といったアプローチが日本の生徒さんにはあると思います。洗練されたアプローチだと思います。しかも時間をかけて、時間をよく使って演奏する姿勢があります。ラインや色づけが非常に微妙で、それは日本の作曲家をみてもわかります。独奏やアンサンブル、室内楽など、音楽全般にその影響が出ていると思います。中国や韓国の学生さんはここ20年ほどの付き合いになりますが、演奏や勉強に対するアプローチが強く、早く勉強したいという姿勢が見て取れます。時間をかけて空間をしっかりと使うやり方ではなく、レパートリーで見ると、中にはうまくいったエクササイズ的な演奏に繋がる場合もありますが、すべての曲やレパートリーでうまくいっているわけではありません。やはり長い目で見て、時

将来の進路はどのように考えるか



「私たち指導者を含めて音楽に携わる方たちすべてに、なるべく未来に渡って静寂の時間を持つことを望んでいます。」(ローラント・ケラー先生)

お答えすることは難しいと思いますが、どちらの場合にも利点と難点があると思います。日本人の場合ですと、比較的高年齢でウィーンにいらっしゃいますが、いつまでも勉強を続け、自立した

らないという傾向が強いと思います。これは私の考えからいきますと、自分自身で人生を切り開いていくのではなく、とても受動的だと思います。先生から指導を受け取るのを待ち、いつまでも教えてもらいたいということだと思います。韓国人の場合ですと、親御さんがわりに早い時期からウィーンに送り出して、競争の世界へ放り込み、天才児として早くから演奏家のキャリアを積みませ、成功させたいという感じがします。もちろんケースによってうまく行く場合もありますが、しっかりとした性格を持っていない場合は、自分を支えることができなくなってしまう、人間的にも精神的にも問題を抱えてしまうケースが多いようです。15歳くらいまでは、先生や親から非常に強く練習するように言われ、練習を重ねていたけれども、留学してから何もしなくなってしまうケースもあるようです。

先生は色々なケースによって対応していかなければなりません。ですから、このような場合は、新しい音楽的な意味を生徒に与える

ように持っていかななくてはなりません。それに対し、わりに年を取ってから勉強したいという方たちには先生から離れて、自立してやってみるようにならなければなりません。

今井先生：日本人に比べて韓国人はわりと早い時期から外国に行く傾向があるというお話ですが、これは音楽を勉強するだけではなく、その国の言葉に慣れるということもあると思います。クラシック音楽と言葉との関係はどのようにとらえたら良いのでしょうか。

江崎先生：マカロフ先生にお伺いしますが、先生はロシアとオーストラリアにいらして、言葉と音楽の違いを感じましたでしょうか。

マカロフ先生：私はさほど上手な英語を話しません、2年前にオーストラリアに移住してからは、毎日英語で教える必要はないわけですが、私のロシア風の教え方というのは、文学や詩、そういった精神的なものに触れながら教えるスタイルですので、それを英語で教えるのは難しいと思いました。周りの人が英語を話しますので、大分慣れましたが、まだまだ下手だと思っています。ウクライナで教えることと、オーストラリアで教えることの違いですが、言葉は何語でも良いのですが、ウクライナの方が、より詩的なものがあるのではないかと思います。ただ、それが他国にないということではないので、共通点は多いでしょう。

今井先生：例えば先生が百人もの音楽家になりたいという生徒を教えた場合、その中から本当に音楽家として成り立つのは一人いるかないかだと思います。運が良くても数人が国際コンクールに入賞する程度だと思います。しかし、入賞したからといってそれで生活ができるという保証にはならないわけですね。そうしますと、その大多数の音楽家になろうと思いい、多くの時間をそこに費やした人たちは、その後ヨーロッパやアメリカではどのように過ごしているのでしょうか。

バスティン先生：多くが教師になると思いますし、また、そうすることで教えるという喜びを発見する人も多くいると思います。そういうわけで、教師になる人や、医大に入って、医者になるという人もいます。アメリカでは多くの医師が実際、音楽を好み芸術を支援していますので、少なくとも共通点があるようです。音楽を教えるということは、ピアノだけに留まらず音楽のすべての側面を理解するようにすることです。

ピアニストとして成功する人は非常に少ないです。もし先生になりたくないのであれば、音楽をやるべきではないと学生によく話します。もし、演奏の場が得られず教えることもしないのであれば、どうするのかという風に、常に現実を見させるようにしております。

私自身は、コンクールに賛成しています。人に目標を与えるということはとても大切だと思います。たとえ成功しても失敗しても、参加したことによって得るものはあると思います。次の年、またコンクールに出たいかと聞けば、やはり出たいと答えます。彼らがピアノを弾き、演奏家になるということ以外に、別の目標をたてることも重要だと思います。

4.クラシック音楽の魅力とその伝え方

音楽を享受することは すべての人に与えられた権利

今井先生：広いペースで色々な教育活動がされているわけですね。演奏家になりたいと思って勉強した人にとって最後のハードルに当たるのは、国際コンクールだと思いますが、その功罪というのは、本当に良いもの、悪いものとして評価できるものなののでしょうか。音楽家にとって必要なものなのでしょうか。

バスティン先生：確かにコンクールに出る方は多いのですが、それがプロになるための唯一の方法ではないでしょう。おそらくどこかで自分の場所というものを各自見つけていくのだと思います。ピアニストは常に演奏旅行にでなければならぬという寂しい生活ですので、それをあまり好まない人もいます。私の生徒でもコンサート活動に3年間携わりましたが、やはり音楽以外のことも勉強したいということで、医者になると言いました。彼女はピアノを弾くのが好きですが、プロにならなくても様々な活動ができるということですから。

今井先生：演奏家というものは、見た目ほど幸せではないというお話がありました。今並んでいらっしゃる先生方にもピアニストとして活動していらっしゃる先生がいらっしゃると思いますが、やはりピアニストになりたくてなったのでしょうか。

橋本先生：ルヴィエ先生に聞いてみましょう。先生はやはり始めから親の希望があり、英才教育を受けて今日の先生がいらっしゃるのでしょうか。また、ご自分がピアニストになると決意したのはいつ頃のことだったのでしょうか。

ルヴィエ先生：私はアップライトのピアノで勉強し始めました。それどころか、最初に触ったのはアコーディオンでした。4歳の時、プ

レゼントとしてアコーディオンをもらい、数日後にはラジオから聞こえる音楽をそらで演奏するようになっていました。私は生まれた町の大学で勉強し、そしてバリの音楽院へ行ったわけです。勉強を終えたところで、多くの室内楽に関わるようになりました。そして国際コンクールに出た後、ソロ活動も始めましたし、音楽学校で教師も始めました。さまざまなことがミックスされた形で活動していたということです。わたしは22年前から、パリ国立高等音楽院で教えておりますが、もちろん演奏会でピアノを弾くことにも幸せを感じております。

音楽を楽しみたい人を支援するシステム

今井先生：聞く人も楽しめるように、つまり聴衆を育てるように日本では何か努力しているのでしょうか。

江崎先生：非常に難しい問題だと思います。コンクールに出場して、栄冠を得られる人は一握りだと思います。しかし、音楽を享受することはすべての人に与えられた権利であり、私たちはそれを支援する立場であるわけです。

バスティン先生にお聞きしたいのですが、アメリカにはギルド試験というのがあると聞いています。一般にピアノを学ぶ子供向けられたもので、ピティナのステップに似ている気がしましたが、日本でも参考になると思いますので、お話を伺えればと思います。

バスティン先生：アメリカにおいては、ナショナル・ギルド・ピアノ・ティーチャーという全国組織があります。審査員を町に送って、指

ことはないとは私は考えます。今までそうだったように、ずっと一つの文化として継承されていくと思います。先生方の素晴らしい教育理念を垣間見て、今後のクラシック音楽の方向性が示された気がします。音楽の価値を再確認できたシンポジウムでした。

●高橋温子さん（東京音楽大学2年）
これから先の自分のため、何か新しい考えを持つきっかけになればと思い参加した、国際シンポジウム。全てが私には新鮮で、内容も納得するものばかりだったが、欧米から見たアジアの国々の違いについてのご意見は、大変興味深かった。

クラシック音楽の定着が他のアジア諸国の中でも早く、一足先に成長を遂げたと言われる日本には、良くも悪くも音楽を学べる環境とゆとりがある。それが個人にどう作用していくかは各々の学び方によるのだが、音楽において現在速いスピードで成長している最中である、他のアジアの国々と比べた時、日本人からは積極性のようなものが少ないように見受けられる。逆に、例えば韓国の学生からは、新しいものへの意欲や際限のない情熱を感じ、それが演奏にも表れているという。また韓国人には、15～16歳という若い年齢で欧米の音楽学校にやって来る学生が多いらしい。これは国内で勉強を終えてから海外に出てくる日本人と比べると、自立心が強いと考えられるようで、そこからは「いつまでも人に教わっていたい」という受動的な日本人の性格と、見方を変えれば、整った日本の教育制度の存在が感じられた。ただ一概に「アジア」と捉えるのではなく、このように各国の学生の特徴を知って、初めて私が学んでいるのは西洋の音楽だけれど、日本で勉強することで他の国の西洋音楽とはまた違った色合いを帯びているのだらうと感じた。当たり前の様で、今まで少しも考えようとしなかったことに気づくことができたと思う。

今回の最大の点として掲げられていた、「聴衆をいかに増やすか」という点についても触れておきたい。パネリストの方々も仰っていた通り、これは本当に難しいと思う。時代の先端を追って常に進化し続けるポップスと比べ、古いクラシックというジャンルの聴衆が少ないことは、悲しいが今現実として確かにある。コンサートに訪れる人々の年齢層の幅を広げ、一過性ではなく、少

導者が、ある条件の中で子供たちが何を演奏するのかを決めます。例えば、4曲〜10曲ほどを弾くといったもので、とても良いことだと思います。これはコンクールではなく音楽と競争するようなものでして、何曲かが、一年後にマスターできる仕組みになっています。一度にではありません。バロック、古典派、現代音楽などの中で、私たちはなるべく学生たちに

があると伺っているのですが、どうなのでしょう。

リタマン先生：そうです。今メモを回していたのですが、オーストラリアにも似たようなものがあるそうで、これは英国のモデルに基づいているということで、マカロフ先生のお話と似ていると思います。お話にありましたように、年齢制限はなく、バスティン先生のおっしゃった長所がすべて備わっているシステムです。いくつかの段階を経て進んでいくようなもので、英国でも、オーストラリアでも、ピアノに限らず他の楽器でも参加できます。幅の広いシラバスになっており、ジャズピアノのシラバスもあり、これは聴衆とのコミュニケーションを考えて後から加わりました。イギリスにおいてはピアノのシステムは予備的なグレードから始まります。訓練を受けた試験官が、参加者の演奏を聞きます。選択する曲はかなり自由ですが、難易度は徐々に上がっていきます。また、理論も含め、その参加者の理解を深めるべく設計されています。これでやる気を増すことができますし、報告書も貰えるようになっていきます。しかも、こういった各グレードを上げていくスピードの条件もありません。イギリスの場合、1年に1グレード上がるのが一般的だと思います。ただしこれは試験のためだけの学習というのではなく、一つの枠組みにすぎません。ボライ先生やバスティン先生のおっしゃったことと似ていますが、若い音楽家の演奏を奨励する、または両親や指導者などのローカルな参加を促すものです。このことによって体系的な楽器の演奏が育つことになります。グレード8と言えば、どのような技量か分かりますし、そこからより高いレベルに上がるということです。

聴衆は増えているか、あるいは増やすためには？

今井先生：教わる楽しさというのはあると思います。私自身は教える立場になってきましたが、教わるのはとても楽しいと思います。音楽に限らず、たとえば水泳教室のようなところで、若い先生に教わって、自分でどうしたらよいかな心配せずに、こうやりましょと、言ってもらえるのは嬉しいし、生きていて良かったと思うことでもあります。日本で生涯教育がバックアップされていることは、とても良いことだと思います。しかし、音楽を生涯教育に入れていこうとしても、とくにクラシック音楽は難しいと言われてしまいます。その難しいという視点を変えていくにはどのような方法があるのでしょうか。

播本先生：今井先生がおっしゃたいのは、同時に聴衆を増やすことにも繋がりますね。これは一番の悩みの種です。実際に日本の音楽大学を卒業しても職業として音楽家になるのは非常に難しい時代になってきています。若い人たちが演奏会を開こうとすると、チケットを売るのに大変な苦労をして、挙句の果てには赤字になってしまいます。これではとても成り立ちません。なぜかという聴衆が少ないからで、ロックやポピュラーのコンサートでは数分でチケットが完売してしまいます。若い人々は音楽を聞きたがっているにも関わらず、クラシックには来てくれない状態です。どうしたらよいのでしょうか。この問題をクリアしないと、21世紀は望みがありません。じつはそのために福田先生は苦労なさっていました。運動をおこして聴衆を増やし、演奏の場をつくっていくために活動しなければと、全生涯かけぬけてお亡くなりになりました。残されている課題というのはそこにあり、核心でもあります。国でも、先生自身でも良いのですが、どのような努力をなさっているのかお話してい



播本 三恵子

曲を選ばせています。一年経った時に、マスターしたという経験はとてもポジティブです。一人の審査員の前で演奏し、どこが良かったか、どこを改善すべきかといったことを伝えられます。非常に客観的で、それが一年の評価になります。ギルドはゴールをいくつか設けておりまして、その一つは10曲演奏して、10年間連続して演奏すると、奨学金が最終的には得られるということです。努力を続けなければならないませんが、ギルドは決して強制ではありません。コンクールではなく、どちらかというと楽しんで、自分の満足感のために参加します。このようなやりかたはアメリカには幾つかあると思います。

播本先生：リタマン先生にお伺いしたいのですが、イギリスにも似たような検定試験があると聞いています。私のいとこがイギリス人と結婚しまして、ロンドンの近くに住んでいます。彼女は会社員ですが、35歳すぎからピアノを始め、検定試験を受けるのを楽しみにしています。毎年それを目指して勉強しています。そのような試験

ただけますでしょうか。アメリカは明るいですね。ボランティアも発達しているようです。

今井先生：アメリカは比較的若い国ですから、柔軟な考えが発達しやすいかと思う。われわれ教育者というのは、ある程度若い年齢の人を育てていく役目を持っています。しかし、聴衆がないと演奏家は活動する場がないと思うのですが、そういったことについてイギリスでは何か取り組んでいらっしゃいますか。

リタマン先生：様々なプログラムがあります。とくにイングランドやその首都、あるいは大都市には、非常にたくさんの聴衆があり、様々なタイプの音楽活動について反応を示しますね。やはり最も聴



っているのでしょうか？

ボライ先生：一つ言いたかったので、一つのモデルとして二つの国を挙げてみます。小さい国ですが、一つはハンガリーです。昔は

「いかにして聴衆を集めるか、あるいは聴衆とのやり取りができるように考えさせるようにしています。様々なタイプのコミュニケーションが存在し、演奏者と聴衆の間にアイデンティティを築くということも重要です。」

(ジャネット・リタマン先生)

衆が集まるのはオーケストラですね。ただ特別なイベント、音楽祭、シリーズものには聴衆を集めることができますが、定期演奏会にはなかなか集まりにくいといったことを経験しております。

私どもの大学で実行していること、あるいは他の学校でも実行していると思いますが、学生に対して彼らの役割を認識するように啓蒙しております。いかにして聴衆を集めるか、あるいは聴衆とのやり取りができるように考えさせるようにしています。様々なタイプのコミュニケーションが存在し、演奏者と聴衆の間にアイデンティティを築くということも重要だと考えます。

今井先生：ウィーンやパリでは、聴衆は増えているのでしょうか。減

百パーセント音楽を理解していた国ですが、今ではそうでもありません。それに代わって、フィンランドがそういう国になりました。フィンランドは人口が少ない国ですが、誇り高い国柄で、国民はみな幸福に暮らしています。国民一人一人が音楽の教育を受けて、音楽を理解できるようになりました。フィンランドで、オペラやコンサートなどのイベントに行くと、エネルギーに満ち溢れています。特に子供のエネルギーを身にしみて感じます。音楽の教育というのは、上からではなく、下から始めるのが大切だと思います。

播本先生：私はこの間、自分が勉強したドイツへ行き、オペラに行ったときに随分変わったと感じまし

れずつでも安定した聴衆を増やしていくこと。それは同時に、これが半永久的に直面すべき課題であることを意味しているようにも思える。本当なら直接コンサートに行き聴衆に触れようとするのが一番なのだ。しかし、更にそのためにどうすれば良いのかとなると、中々先に進めない。一人が何かをすれば解決する問題ではないだけに、考えるほど空回りしているような気がする。メディアやオーディオ機器の発達で演奏に足を運ぶ機会を減らしている一方で、それらを逆に活用するというご意見が、シンポジウムであったように記憶している。私もそれに賛成だ。音楽を勉強しているか否かは関係なく、クラシックを耳にするチャンスの多いもの、少しでも馴染んだものに。自分が、周りの人が、とにかくクラシックを自然と聴くことの出来る環境作りから始めてみてはどうだろうか。テレビやラジオ、ネットを活用することで可能だと思うし、CD・DVD・LDという手段も、今は一般的になってきている。友達・家庭などの間での小さな試みにも挑戦してみたい。

ジャネット・リタマン先生は、イングランド、特にロンドンにおいては専門学校など一貫教育が充実していて、音楽活動がしやすいと仰っていた。それを拝聴して思い出したのが、以前私がロンドンに滞在していた際、何度かコンサートに行った時のことだ。ロンドンの中心には気軽にクラシックを聴きに行くことの出来るホールが点在していた。オペラがもしれないが、車で走っているとつい先ほど目にしたような、決して大きくはない建物がまた出てくるのだ。夜になるとその周辺にはス



今井 顕

た。若い人が少なく、中年層ばかりが見に来ていました。

今井先生：オーストリアも日本と同じように年を取った方が多く、子供が少なく高齢化の社会ですね。若い人にとってクラシック音楽は面白くないというのが問題です。

播本先生：そうですね、そのために聴衆が少なくなっています。

音楽の魅力を伝えるには どうしたらよいか

今井先生：やはりクラシック音楽には古いというイメージがあるのでしょうか。それよりも、クラシックそのものである、モーツァルトやバッハの音楽が今後も生き延びていけるのか、あるいは生き延びるとしたら、どのあたりに魅力があるのでしょうか。伺っていきましょう。

ケラー先生：色々な問題が一度に出てきましたね。これは音楽教育者にとって、現在と未来にわたる一番大切な課題の一つだと思います。若い世代に音楽の美しさを伝えていける立派な教師が沢山育っていかなくてはなりません。残念な現象として、学生や若い人たちが一生懸命に楽器を練習しても、なかなか演奏会に足を運ばないという傾向があります。ボタン一つ押せば、家でいくらでも音楽を聞けるという現状がありますから、生きた演奏を聞く機会が失われていく危険性が增大しています。ですから生きた演奏を伝えていくの

は、非常に難しい課題になってきています。これはどうしたらよいか分からないのが実状です。

今井先生：私が日本人を見てみると、これは日本人の特性なのかもしれませんが、完璧であることの美しさという言葉が頭に浮かびます。この間もソルトレークでオリンピックがありました。例えばフィギュアスケートは、少しでもミスしたら許されない世界ですね。なにかCDのような完璧な演奏が増えることによって、それが当たり前のようになり、ミスタッチはよくない、点数が悪い、賞が取れないといった価値観が当たり前になってしまったようです。フランスではどうなのですか。ミスタッチは毛嫌いだされるものなのでしょうか。

ルヴィエ先生：フランスでは、必ずしもはっきり言える状況ではありません。しかし、楽観視はしていません。一つ大きな敵がいると思います。それはマスコミです。最初にレコードが誕生した時を思い出してください。1世紀以上前になるかもしれませんが、これはどうして誕生したかという、遠方にいる人のためにも素晴らしい演奏を提供しようという理由からです。これは本当にすばらしいアイデアです。それが何年も経ち、今日では毎日8百枚もの新しいCDが売られているということです。昔はCDではありませんでしたが、もともと生産が少なかったこともあり、人々の心や耳をひらく役割を持ち、文化がそこで開かれました。現在では売ることによって集中し、お金の問題になっており、とても危険だと感じています。どうしたらよいかはまだ分かりません。

一つの答えはやはり子供に期待することでしょう。そして先生にも期待すべきだと思います。何かにトライすることは絶対に必要です。音楽を聞いて、楽しむことをしてもらわなくてはなりません。教える側の心理学的努力によって、子供に楽しんでもらう努力も

必要だと思います。たとえばゲームとして教えるなど、プレゼンテーションを考えるということです。学ぶということも、遊びとしてプレゼンテーションすれば子供はそれを楽しむかもしれません。

音楽を愛する人にとってフランスは困難な状況ではありませんが、一般的に先生方のおっしゃるような事実もありますので、政府やマスコミは文化を促進する役目を果たすべきでしょうね。たとえばフットボールに比べて、テニスやチェスを見る人は少ないけれども、こういったゲームには耳も頭脳も必要です。テレビでそのようなゲームを見ることによって人々は関心を持つと思います。たとえば週に10回放映するなど・

今井先生：経済効果がないものは、なかなか人気が出ない、あるいは社会で成り立たないと言えます。CDの販売などもそうですね。音楽をお金のためにやるのは根本的に間違っているのでしょうか。

ルヴィエ先生：そうあって欲しくないですね。むしろその逆で、お金のためではないのだということを若者に教えていく必要があります。しかしそれは毎日の、現実との戦いだと思います。なかなか難しいと思います。われわれ教える立場の人間にとって、経済性ということは忘れるべきだと思います。

バスティン先生：一言だけ言いたいことがあります。音楽を本当に楽しめるか、クラシック音楽が若い人にとって面白いかどうかということは、はっきり言って先生次第だと思います。先生が最初からクラシック音楽をどのように提示するかということです。例えばベートーヴェンの歓喜の歌は子供を含め、誰もが好きです。私も初めて聞いた時から好きでした。そのようなエクサイティングな体験を始めから、しかもボトムアップでしなければなりません。それはわれわれの責任です。

5.期待と課題と

クラシックの未来は楽観的?

今井先生：先生は何回も日本にいらしゃっていますよね。先生からご覧になって、日本の一般的なピアノの教育者に一番かけているところはどのようなところでしょうか。

バスティン先生：欠けているところはないと思います。日本の方から聞く新しいアイデアはとてもクリエイティブで、例えばゲームで教えるなど私も学ぶところが多いです。一昨日、子供さん達の教室に行ったのですが、音楽を作ったり、デュエットで演奏したり、色々なエクササイズなどことをやって楽しんでいました。とにかく、まだ何も知らないのですから音楽を紹介することです。子供も提示の仕方次第で、興味を持ってくれると思います。

今井先生：子供とゲームをしりして音楽の勉強を進めていくことは、マカロフ先生もサーシャ君と実行していってらっしゃったそうですね。彼の場合は浜松のコンクールで1位になり、プロフェッショナルな音楽家としての道が拓けてきたわけですね。彼を子供の頃からずっと育ててきて、先生の教育の目的は、音楽と共に生きていくことを教えてあげるということですが、いかがでしょうか。

マカロフ先生：先ほど話題にのぼりましたテクニック重視というのは、残念ながら現実です。また音楽の現状に対する問題提起ですが、これは今に始まることではなく、いつもそうだったと思います。クラシック音楽が例えば人間の精神生活の主流であったことはあまりなく、ただ片隅にある存在だったと思います。地球というのは非常に大きな惑星ですから、どこでも音楽が広がるというわけではなく、場所は限られていると思います。また、これは他の方と同じ意

見ですが、将来は子どもにかかっていますので、最初はどう音楽を提示するかが大事で、良い指導者が必要です。メソッドもただ単にプロとしての音楽家を育てるだけではなく、人間として良い人間となるように、また、人生に興味を持つようなプログラムをつくれれば成功すると思います。

前回のサーシャの日本ツアー(2001年7月)ですけれども、会場はどこでも満席で、若い人で一杯でした。今後もそうであってほしいと願っています。今後、先生も変わるかもしれませんし、彼の演奏も変わっていくでしょう。しかし、彼の将来には楽観視しています。クラシック音楽は消えるものではなく、永久に続くものだと思います。

音楽との初めての触れ合いと、仲間との音楽体験

今井先生：やはり、聴衆を増やす、あるいはその喜びを高めようとするためのクラシックの魅力とはどこにあるのでしょうか。文化といっても、音楽だけでなく、絵画も演劇もあります。ここに外国からいらしゃった先生方から、音楽から離れられなくなった理由を聞いてみたことはありませんか。

播本先生：そうですね。私はライブの音と、録音の音との違いについて、先ほどルヴィエ先生が指摘をされたことについて興味があります。今後、ライブの演奏会の魅力をどのように作ればよいでしょうか。

ボライ先生：少し年代をさかのぼりますが、例えばバーンスタイン、ルビンシュタイン、ホロヴィッツといった過去の偉大なピアニストの伝記を読むべきだと思います。彼らが幼い時に何をしたかという

一ツやドレスあるいはジーンズ姿の多様な国籍の人々が集まり、大変賑やかだったことを今でも鮮明に覚えている。規模が小さいということもそうだが、それらのホールには入りやすさ、観しやすさ、プログラム構成、落ち着いた内装という共通点があり、何よりバリアフリーは驚くほど充実していた。老若男女問わず、あらゆる聴衆が楽しめるような環境が整っていたように思える。クラシック音楽の歴史、宗教、雑多な人種、それらイギリスの特徴が絡み合った上での土壌が既に出来上がっていることに、今思い返してみても大きな感動を覚えるのだが、果たして今の日本にはどのような方法が適しているのだろうか。娯楽溢れる世の中で、人々の心を掴むことは出来るのだろうか。

21世紀の音楽教育がこれからのクラシックの普及に関わってくることは必至だ。全体的に音楽人口が減っていると言われる中で今何が出来るかを考えた時、やはりまず個人という最小の単位に戻ってくることになると思う。私達一人一人が音楽を楽しみ、学び、伝えることが全ての第一歩になるのだ。小さなことだと思えるものもいつか1つに纏まって、将来大きな変化をもたらすことができるかと思う。



江崎 光世

ことを読むと参考になるでしょう。例えばバーンスタインの伝記を見ますと、子供時代に家のガレージで近所の子どものためにカルメンをプロデュースしたという話があります。もちろんテレビがなくメディアに音楽があふれるようなことはなかった時代です。皆さんにも子どもの時に、音楽について何かを実行してみたり、例えば音楽や劇を友達と制作したような経験があるのではないのでしょうか。

今、われわれがなぜ音楽家になったのかというご質問がありました。私は5歳の時にとても大きな

た子どもを繰り返し教えたいと思います。本当にスリリングで、それこそが音楽の魅力だと思いません。それを全世界と共有したいと思いません。われわれ一人一人が貢献できることだと思います。

今井先生：自分一人ではなく、仲間と一緒に何かを創造していくことがいかに素晴らしいかということ、を、熱く語っていただきました。ピティナが少しずつアンサンブルを始めたということは、間違っていないかったですね。もっと広げていきたいですね。

ん。それを通して、子どもたちがもっと音楽を勉強したいと思う体験を積むことによって、生涯音楽と離れられない人間に育つのではないが、というのが私の考えです。そう言う意味で、ピティナではアンサンブルやデュオなど、あらゆる面で幅を広げていて、そこが福田先生の素晴らしい点だと思います。バスティン先生にお伺いしたいのは、子どもに対するアンサンブルの与え方に関してどのような意見を持っていられるかということです。

バスティン先生：素晴らしいことだ



ピアノをもらって好きになり、練習するようになりました。そして16歳のときにオペラを作りました。今聞くと、とてもシンプルで恥ずかしいものですが、その時の舞台を今でも思い出します。それは私にとって人生そのものでした。私の人生はそういう意味でとても素晴らしいものでした。世界中を旅して演奏し、優れた生徒を教え、海外の友人と一緒に楽しむことができます。

なぜこうなったか考えてみると、スタートが肝心だという結論に達します。生活として楽しい何かを与えること、その一つが音楽だと思います。マーティン・ルーサー・キングが、誰しもが音楽を勉強すれば戦争はありえないと言いました。その信条が私の生活のよりどころです。昨日は5歳の子どもに教えました。また、発つ前には8歳の子どもに初めてのレッスンをしました。何度もこういっ

江崎先生：やはり人間は、一人では絶対に生きていけない動物なのです。人とのコミュニケーションの中で、自分を磨いたり、充実感をはかっていく動物であるはずで、今までピアノというのは、ソロ楽器として注目されていましたが、もっと幅の広い活動の場があっても良いと思います。ピアノを通して人とのコミュニケーションもできると思います。そのように音楽を育んでいく中で、楽しさを味わう体験を是非していただきたいと思っています。私がアメリカに行って一番思ったことは、完璧に演奏するというのではなく、楽しんで演奏するということが、楽しんで演奏するように教師が教えていないことが、日本の一番の弱点だと思います。まず私たちは、自分が音楽をすることの楽しさを、それから音楽を通して得られた充実感をもっと子どもにアピールしていかなければなりませ

と思います。私たちはもっとアンサンブルをやるべきだと思います。サンディエゴのコンクールでは、アンサンブルのコンクールもあります。2台ピアノ、デュオ、室内楽のコンクールもあります。ヴァイオリンやフルートとの合奏というのもあります。このように他の人と合奏することは重要ですし、またこれを楽しむことによって、友人も増えると思います。絶対にお勧めします！

挿本先生：ありがとうございます。最後になりましたが、先生方一人ずつ、聴衆の皆様に向かってポジティブなお話をさせていただきをお願いします。

ボライ先生：私達、それから聴衆の皆さんは、家族の誰かや生徒に対して教育を行う立場にあると思います。私たちは教師として、人々の精神的な教育にも携わることが

できるという運命を与えられています。教育することによってこの世界をよりよいものにしていくことができるのです。

クラシック音楽というものが何であるかは、はっきりしていません。例えばロック音楽もありますし、パレストリーナの宗教音楽もあります。それらすべてが混ざったものだと思います。私は何か音楽を聞いて、それが魂に触れるものであれば、それは偉大なものであると思います。例えば、子守唄やヴェニスのゴンドラの歌かもしれません。あるいはメトロポリタンオペラでのオペラやショパンの前奏曲かもしれません。つまり私の魂に触れるものであれば、それは音楽なのです。また、ここに集まっている人々は皆それを教え、そして、それを他人に理解してもらえるように努力することができるわけです。このことを私たちが実行していけば、地球上でもっとも偉大な人間になれるわけです。これは私の言葉ではなく、20年ほど前にアメリカのAT&Tの社長が言った言葉です。まさに今日と同じような会議で、私たち教師に対して、彼が言った言葉です。

例えば宗教のリーダーや医師というのは、人生に多くのものをもたらす人間と見なされていますけれども、私たち、あるいは皆さん方は教育者であるということ、人々に美しさを発見させる手伝いをしているわけなのです。バスティン先生もおっしゃいましたけれども、生徒たちに人生における経験をさせようとしているわけです。子どもと一対一で作業することができるということ、あるいはそれが大人であっても同じことですが、それが私たち教師にとっては最も偉大な経験であり、そういった機会を常に喜ばしく思っています。

ピティナとはすでに20年来の付き合いであり、今後も福田先生の信念をもとに、皆さんは努力を続けていくことと思います。故福田先生のもので、皆さん方はエネルギーを持って努力されていらっしゃると思います。その結果をいざねお

出しになることができるだろうと思っております。ありがとうございます。

バスティン先生：私は福田靖子先生をボライ先生と同じくらい昔から存じ上げておりましたが、彼女から人の能力を判断してはいけないということを知りました。私は自分自身に言っているのですが、朝起きると、今日教える生徒は、私が教える最高の生徒だと思って毎日教えています。そうすれば夜眠る時に今日も良い仕事をしたと思えるでしょう。福田靖子先生も同じです。決して努力を止むことはなかったということです。私もそれに従いたいと思います。ありがとうございます。

マカロフ先生：私は残念ながら福田靖子先生を存じませんでした。しかし、福田先生のお仕事の成果は素晴らしいものであったことが、今日見て取ることができました。そして、こういった機会を私に与えていただいたことを感謝しております。また、ピティナに対しても、この数日間していただいたことに対し、感謝を申し上げたいと思います。私たちは、音楽家あるいは教師ですが、みな神に選ばれてクラシック音楽という魔法の庭園を造る運命を与えられたわけですね。私たちは生徒を愛しており、彼らにできるだけのことは与えたいと思っております。そしてこの気持ちをいつまでも持ち続けたいと思います。今日おいでいただき、話を聞いていただいた方々にお礼を申し上げたいと思います。

リタマン先生：私は最初に福田先生にお会いした時、彼女の持っていたビジョンや決意、そして人々に対する深い愛情のようなものを感じ、非常に驚きました。ピティナという、これだけの組織をつくることのできたビジョンに感銘を受けました。その影響というのは日本だけではなく、国際的に広がってきているわけです。そのようなビジョンがあったわけですから、

●福田里香さん（正会員、2001年英国王立音楽大学スカルシップにて同大学大学院課程修了）
「Let's enjoy music in our life!」

国際的に評価の高い6名のピアニスト、ピアノ指導者によるパネルディスカッションは、私にとって、これからのピアノ指導のあり方や、自らの音楽に対する姿勢を再考する良い機会を提供してくれた。

中でも、「生活の楽しみとしての音楽を！」と言うP.ボライ先生の発言に深く共感した。音楽をエンジョイすることで、いかに人生が豊かに過ごせるかを知った人は、積極的に音楽に関わるようになるであろう。そして、良い聴衆が生まれ、その聴衆に応えるような音楽家も同時に誕生するのだと思う。「生活の楽しみとしての音楽」を身を持って知っている人は、ピアノ演奏スキルの習得にも前向きに取り組むだろうし、その音楽をして他の人達とコミュニケーションしたい、と言う気持ちが自然に湧き起こってくることであろう。

しかし、日本でのピアノ教育の中に私がしばしば感じるのは、「楽しみでやる人は趣味で下手な人」「上手になりたい人は楽しんでいない場合ではない」と言う風潮である。私自身、今でこそ、生活の楽しみとしての音楽が日常生活にどっかりと根を下ろしているものの、それまで日本で経験したピアノレッスンで、「楽しみ」なんて想像したこともなかったし、日々の練習は刻苦勉励と言った感じであった。指の方は達者に回るようになったものの、大した上達もなくいたずらに時間が過ぎていったように思う。

総合司会の播本三恵子先生が、シンポジウム中でおっしゃっていたように、現在、日本のクラシックのコンサートにはポピュラー音楽のような圧倒的な集客力がない。それは、高度成長期以降、膨大な数のピアノ学習者が全国に誕生したにもかかわらず、その数に比例してクラシックコンサートの聴衆が育つことがなかった結果とも言えよう。

このような状況の中で、これからのピアノ指導者は、今以上に、レッスンを通じて「生活の楽しみとしての音楽」を浸透させる使命があると思う。それには、指導者自身がまずその楽しみを十分体験している必要があるだろう。合わせて、社会人として円満な人格と高い指導力の両方が求められる事と思う。

幸い、私は、このシンポジウム

日本だけでなく、世界全体における将来の心配はまったくないと思います。日本だけでなく、世界全体に対して同じことが言えます。確かに音楽の世界は変化してきております。消えていくものも目に付くわけですが、若い芽も生まれてきております。これは既に今回の会議でも見出すことができました。

私は音楽の将来を楽観視しております。音楽を大事にして、音楽が個人に対して何ができるかということを知っている方がたくさんいらっしゃると思います。音楽というのは、ただ他人がやっているものではなく、皆さんご自身が作り出しているものなのです。努力を続ければ、多くの人を音楽に引き込んでいくことができます。将来は安泰だと思います。そのようなメッセージを福田靖子先生が私たちに伝えてくださいましたので、それを引き継いでいかなければならないと思います。

ルヴィエ先生：私も同じ言葉を繰り返すことになりそうですね。教えるということは、愛情をもって行うことであります。色々な人間を愛するという、教えることに愛情を感じるということです。他人に対して温かい気持ちを持つということです。私たちは、それを可能にする力を持っているわけでありまして、音楽の教師であることを、神に毎日感謝しております。

よく友達に冗談で言いますが、教えるということは、そう簡単には一言で言えないけれども、生徒とクラスで海外について話をしたり、映画や演劇について話をしたりする機会も含まれていると思います。もちろん指使いやペダルの使い方などについても話をするのですけれども、それだけがメインではないわけです。私たちが自分自身の人生を愛していくということは、おそらく福田靖子先生も望んでいらっしゃるのではないかと思います。

ケラー先生：ただいま皆さんからお話がありましたように、福田先生



の個人的なイニシアチブ、それからピティナの総指揮及び指導者としてのあり方について、皆さんの意見に賛同させていただきたいと思っています。ただ私は、その他の音楽そのものに関するものを2、3つ述べさせていただきたいと思っています。30年以上も前に、ドイツ人で何回も日本に訪れ研究した方がいまして、『静寂の文化』というタイトルの本を出しました。芸術家として、あるいは精神的に芸術と携わる者として、いかに静寂が大切かということに関し、私はこの本から深い感銘を受けました。どんなに芸術的な行為も、すべて精神的なものとの繋がりを求めるという憧れから発していると思います。これはまったく何も聞こえない静寂の状態でのみ可能であると思います。もちろん音楽は演奏の際に音を出すわけですが、音楽にとっても、この静寂というものは非常に大切だと考えます。演奏を始める前や終わった後に、静寂という瞬間があり、それも音楽に属しています。私たちを一番感動させる瞬間、私たちの心を振るわせる瞬間というのは、静寂にあるということが言えます。時には休符のあるところで感動することもあります。現代の私たちの生活には、騒音が入ってきて、静寂を得ることがだんだんと難しくなっています。私は皆さんに、それから私たち指導者を含めて音楽に携わる方たちすべてに、なるべく未来に渡って、静寂の時間を持つ

ことを望んでいます。ありがとうございました。

播本先生：それでは時間になりましたので、このあたりでシンポジウムを終わらせたいと思います。生方を拍手でもってお送り下さい。どうもありがとうございました。会場の皆様方も、大変長いありがとうございました。国際シンポジウムというのはお話を聞けるのがなかなか難しいものですがやはり言葉というのは課題だと思っています。これから世の中は狭くなりますので、語学は大切だと痛感しました。今井先生は全部お分りになりますので、先へ話を進めていただきましてありがとうございました。

江崎先生：どうもありがとうございました。本当に色々な国の先生のお話を伺って、音楽に携わる者として抱える問題や悩みは、世に共通だと思いました。そして、生方はそこに情熱をもっていらっしゃいました。共通していること、情熱でした。そして、その情熱について35年前を振り返ると、ま、このような組織はありませんでした。何も無かったところからこのだけの組織を作り上げて、一人一人のピアノレッスンに夢と希望を与え、そして未来へ向かって子どもたちに対し、どういこうをしなければならぬかを目の当りに示してくださった福田先生、感謝をしたいと思っています。この

田先生が残された光を、私たち一人一人が心に銘じて、その光を絶やさないようにすることが、これからの若い皆様に期待される大きな仕事だと思います。それによって生き生きとした人間になり、生きる力を子どもに与えてくだされば、子どもたちも楽しい音楽との交わりの中で生きていけるでしょう。何も専門家になることがすべてではないと思います。音楽を通して生きる力を与えられれば、それがなによりだと思います。本当に貴重な体験をさせていただいたことに対し、心より福田先生、ピティナ、先生方やお世話になった方々に感謝したいと思います。ありがとうございました。

今井先生：今日は割り込んで話を続けていく手伝いをさせていただきましたが、本日、皆様ご来場下さりまして本当にありがとうございました。どのくらいの方にきていただけたのかということが、私たちの最大の心配事でした。いまずべて終えまして、この会場の雰囲気を感じていますと、多くの方々が、ここへ来て話を聞いたことを良かったと思ってらっしゃるのではないかと思います。ありがとうございました。先ほどから私は、日本人についてなどのお話をさせていただきましたが、ここでもう一つ言いたいことがございま

す。われわれは、こういった話を聞いても、会場から出てしまうと心のふたを閉めてしまい、過去のこととして忘れてしまうことがあります。そうではなく、せっかくここで共通の時間を過ごしたので、一人一人が自分にできる何か一つのことをしていただきたいと思います。どんなことでも良いと思います。ピアノを弾くときも、前に座ってどうやったら音が出るのか、どうやったらうまく弾けるのかと考えているだけではその曲はうまく弾けません。音を出してみないと音楽は生まれません。今日、話の中で何か感激することがあったら、それを人に伝えるだけでも良いと思います。また、自分にできることがあったら、それを信じて一歩ずつ進んでいけば、音楽が未来に向けてひらけていくと思います。

播本先生：私は何も申すことはございません。お二人の先生がすべて代弁してくださいました。では皆様、どうもありがとうございました。そして福田先生、見守ってくださいましてありがとうございました。今日はこれでシンポジウムを終了させていただきます。

の翌日にボライ先生の公開レッスンを受講して、聞く人とのコミュニケーションを重視したボライ先生の音楽作りに接することができた。指導を受けて、私の心の有り様はその場で大きく変化したようだった。何百回も弾いてうんざりしていたパッセージが、一つ一つ自分のクリエイティブな音にとって代わり、私の熱い思いが音楽を通して流れ出て行く…

シンポジウムのパネリスト6人はいずれも、優れたお弟子さん達を多数育成した実績のある先生ばかりだったので、私は、楽しんでどんどん上手になる魔法の術を披露してくれるのか、と耳をそばだてていたが、もちろん特効薬などなし。時間芸術である音楽は、生活の楽しみとしての音楽を熟成させた人に、相性が良いのかな、と思いつつ家路に急いだ。

●西之原真理子さん（指導者会員）
「演奏会における聴衆について」

国際シンポジウムにて、様々な国の音楽（クラシック）の現状、音楽教育の現状を拝聴する機会をいただき、色々な面で刺激を受けるとともに、自分自身の方向性も考える時間を持てたこと、とても感謝しております。

私的な考えで恐縮ですが、私自身ずっと思い描いていることがあります。それは、もし、誰でもが好きな時に演奏してそれを聴いてもらえるような場所があったなら。その演奏がどんなに技術的にどうであれ、どんなに経験が浅くとも全く構わない、弾きたい！聴いてほしい！そんな思いを持っている人ならばいつでも弾ける場所。もし、そういう場所があったならばもっともっと興味を持つ人、弾きたい人、聴衆も増えるのではないかなと思うのです。

弾きたい人がたくさんいる時には順番までは聴衆側に回ることになる。そうすればその弾き手のいろいろなところからまた自分自身も成長していける。また、いろんな人の音楽を通じての思いを共感しあえる。そして、もっと身近なものに出来る。ただ、おもむろに上手だからと言ってプロの演奏を聴きに行ってもつまらないと感じる人もいられるかもしれないけれど、もっと身近な人が身近な所で演奏しているのを聴きに行ったりすれば、興味を持ち自分からまた別の演奏を聴いてみたくなるかもしれない。その方が自然ではないでしょうか。実は自分自身、このことに当てはまる経験があります。同じピアノ教室に通っていた人の演奏は自





分といろんなところを比較したり、あんな風に弾けたらとか、いろいろと興味がたくさんわきあき入るものの、これを聴いてみて、と言われたものはどんなにすばらしいものでもつまらなく感じたのです。自分から目を向けられる環境、それが一番重要なのではないかと思います。とても、勝手な思いばかり綴ってしまいましたが、これから、もっと身近で親しみを持って音楽を楽しみたいと感じられる瞬間を自分自身もたくさん持てれば、また多くの人とそういった時間を共有することが出来るように

していけたら、そうこの機会を持って実感いたしました。

●小畑錦子さん（正会員）

「遠い目標を求めつつ足元の一步を」
一指導者として、たくさんの知識を戴きました。もっと若い時にこの様な事を知って居たら世の中に多く貢献出来たと思います。各々の指導者が自分の足元を見つめ、身近の生徒に接してこそ未来が開けて来る、と再度認識しました。私はいつも、底辺を広げる事で山を高くする事が出来る、と信じて我が地域の中で活

動しています。今しばらく健康を保ち、身近にかかわる子供と、市内の大人のピアノ・サークルの皆さんと共に音楽を楽しみ、御仲間の先生方と手をつなぎ、私も音楽を楽しませて戴きます。

●阿波田のぞみさん（指導者会員）

自分に出来る事は、微力ではありますが、身近な子供達から、次の世代へ音楽のすばらしさを、いろいろな形で伝えていくことだと思っております。今回のシンポジウムを聞き、音楽に携わる事は、責任のあるやりがいのある仕事であり、役に立つ喜びであると感じました。

●土井淳子さん（支持会員）

各国の音楽教育の実状をこの度の国際シンポジウムで知ることができた。21世紀は、宇宙をまるごと受け入れ、表現していけるような、より普遍的な音楽活動も必要となってくるのではないが。

●平野美保さん（指導者会員）

専門家になることが全てではない。未来へ向かっている子供達へどうやって伝えていくか光を絶やさぬように、今自分に出来ることを信じてやってみることが大切である。

ピティナ全国決勝大会 海外招聘審査員を迎えての

徹底研究ショパンエチュードop.10 全曲公開レッスン



2000年浜松国際コンクール優勝者
アレクサンダー・ガブリリクを育てた師

Victor Makarov

日程：2002年8月28日（水）（ピティナ浜松大会7日目） 11:00～13:00 / 14:30～16:30 / 17:00～19:00

会場：音楽の友ホール（地下鉄東西線神楽坂駅下車1分）
協賛：ピアノの雑誌ムジカノーヴァ

講師：ヴィクトール・マカロフ

2000年第4回浜松国際ピアノコンクールで最年少16歳、審査員満場一致で第1位を受賞したアレクサンダー・ガブリリクの師として、一躍脚光を浴びる。1998年ウクライナより門下生5名とオーストラリアへ移住。「人龍形成」を重要視し、門下生と生活を共にする独自の指導法は著書「子供のピアノ指導法（邦訳未）」に詳しい。サンクト・ペテルブルク音楽院修了。現在オーストラリア音楽学校ピアノ科主任。

お問合せ：社団法人全日本ピアノ指導者協会 本部事務局 正木（演奏研究委員会担当）
TEL.03-3944-1583 / FAX.03-3944-8838 / Email.masaki@piano.or.jp

聴講料
1回券 ￥3,000（会員・学生）
￥4,000（一般）
通し券 ￥8,000（会員・学生）
￥10,000（一般）
＊聴講料は定員になり次第締め切ります。